

貴族の子女が通う王立魔法学園を卒業してから一年が過ぎたごろ、多くの同級生がそうするようにわたしも例にもれず宮廷に勤める役人としてそれなりに忙しい日々を送っていた。そんなある日、宮廷を揺るがす事態が起こる。それは教会が伝説にうたわれる聖女の召喚に成功したという話だ。神の寵愛を一心に受けた存在である聖女は、どんな魔法でも思うままに使いこなすような病や傷でも治すという。

それが面白くないのが貴族たちだ。聖女自身に野心がなくとも、伝説の再来を成し遂げた教会勢力が宮廷での発言力を増していくのではないかと危惧を抱いているものが少なくないらしい。

一応わたしも、公爵令嬢として彼らと同じ心配をしなければならぬのだけれどもそういった策謀や政にはめっぽう弱かった。学園でも積極的に人とかわることが苦手で、陰で馬鹿にされることも多かった。もっとも勉強だけはよ

くできたのと、身分が高いから表立ってわたしを侮辱する人なんていなかったけれど。二つ年下の妹のヴィヴィアンは明るくて活発な性格でおまけに美人でよくモテる。わたしは父親似だが、彼女は華やかな容姿を持った母親に似ていた。ハチミツ色の髪がかわいらしく、淡い色のドレスがよく似合う。

男の人に優しくされたと思ったら実は妹が目当てで、出会いを取り持ってほしいと言われたことも両手の指の数じゃ足りないくらいだ。

それで妹もわたしを見下してくれば少しでも憎めるのだろうか、彼女はそういった悪意とは無縁だった。それどころか、よく懐いてくれており暇があれば一緒に服を仕立ててもらおうと誘ってくる。

「お姉さまも自分に似合う色のドレスを着て、髪を巻いてもらえばいいのに。たっぷりとしたつやつやした黒髪があるのに、ただおろしているだけなんてもったいないわ。編み込んでうなじを出して少しセクシーにして、こっちの深

みある青いドレスなんてお似合いだと思ふの。そうだ、今度評判の仕立屋と一緒に行きましようよ」

ヴィヴィアンはパンフレットを手にしながら、どれのドレスがわたしに似合うか首をひねる。無邪気なかわいい妹は心からそう思っている様子だったが、家族以外の人間にずっと比較され続けていたわたしはあいまいな笑みを浮かべて妹の誘いをずっと断っていた。

家族全員で食卓を囲んでいたある日、父から結婚の話が来ると知らされた。妹へ山のように届く求婚から、本人と両親の眼鏡に見合った男が現れたらしい。とぼんやりとしつつ話を生返事で聞いていると母が咎めるように眉をつりあげる。

「ヘレナ、あなたちゃんと聞いているの？」

「ええ、お母さま。わたしはお父様とお母さまとヴィヴィアンが賛成しているならなにも申し上げることはありません」

「あなただったら、どうしてそんなに他人事なの？ 自分の結婚の話なのよ？  
ちゃんと考えないとダメじゃないの」

ナイフとフォークで肉を切り分けていた手がピタリと止まる。

——結婚、わたしが？ だれと？

思いもよらぬ話に、わたしは顔を上げてまじまじと母の顔を見つめてしまう。

「あなた、もしかしてとは思うけどろくに聞いていなかったのね……」

母があきれるようにため息をついた。あいまいに笑えば、母が眉間にしわをよせる。

「もう、ヘレナ。どうしてあなたは勉強はできるのに間が抜けているのかしら……。ではもう一度言います。ほかでもないあなたに、求婚のお話が来てい

るの。お相手はフレデリク王太子殿下よ。小さいころに何度かご一緒に遊んだことがあるでしょう。それについて先日までは同じ学園に通っていたから知らぬ仲というわけではないでしょう」

公爵令嬢として、確かに家ぐるみでの親交はあった。幼馴染といってもいいだろう。だが成長して学園に入ってから言葉は交わすことは必要最小限しかなかった。それに多少なりとも気心の知れた身分の釣り合う年頃の女性であればヴィヴィアンもいるのに。

「なぜ殿下がわたしに求婚を……。有力貴族と王家が婚姻して教会に対抗したいというならなにもわたしでなくてもいいでしょうに」

教会に対抗するため、王侯貴族で婚姻し、地盤を固めたい。そういった意図がある婚姻なんだろうと納得はできる。でもやっぱり勉強だけできる頭でっかちなわたしと、欠点のない貴公子で皆の憧れの的であるフレデリクとの結婚話

が持ち上がったのか心底不思議だった。

それにわたしはフレデリクが苦手だ。誰にでも優しい王子様はもちろんわたしにも優しい。その誰にでも振りまく優しさに、ドギマギして勘違いしそうになってしまうから、なるべく顔を合わせたくなくて、学園に通っていた時も極力避けていた。もしこの話を受けて直前で破談になったりなんてしたらもう立ち直れる気がしない。

「それって本当にわたしへのお話なんですか？ ヴィヴィアンじゃなくて？ わたしは順番とか気にしないから考え直してもらえませんか」

率直な疑問を口にすれば父母は卑屈な娘の言動をたしなめてくる。

「先方はヴィヴィアンではなくあなたにぜひに、とおっしゃっているの。断る理由がないのならお受けするしかないわ」

いくら公爵家とはいえ、主君の命令には逆らうことは難しい。よほどの理由

がない限り、この婚姻は覆せないだろう。そしてわたしにはほかに浮いた話も、縁談もない。

「……わかり、ました。お受け、します」

わたしがしぶしぶと了承すれば、両親は明らかに安堵したような表情を見せる。そして食事中にも関わらず執事を呼び出し、先方にお返事の手紙を、と急ぎ足で出ていった。

「さすがお姉さま！ わたしも王太子殿下のように素敵な方から結婚のお話があればいいのにな」

無邪気に喜ぶ妹を眺めながらわたしは引き攣った笑みを返す。これからの未来を思うと、好物の桃のコンポートも味がしなかった。

「やあ、ヘレナ。久しぶり。学園の卒業式以来だね」

「……王太子殿下におかれましては、ご機嫌麗しく」

さっそく顔を合わせる事になった幼馴染は、昨日別れた友人へ向けるような気さくな笑顔を浮かべる。何を話したらいいかわからずに形式ばった挨拶を返せば、フレデリクはにこりと微笑む。

「いやだなあ、昔は一緒に庭を駆け回った仲間じゃないか。他人行儀な真似はよしてくれよ」

フレデリクは武芸と指揮官の才能に恵まれており、いまは軍の仕事を任されていると噂には聞いていた。ピシッとした軍服をきっちりと着こなした様は昔よりたくましく、凜々しい。きゆうつと胸が締め付けられる。

陽光にきらめく銀髪も、澄んだ空のような青い瞳も昔と変わらず美しい。王宮の中庭に設けられた庭園を散歩しているだけなのに、フレデリクは絵になっ

た。

わたしも両親が用意してくれた評判の仕立屋のドレスに、大粒の真珠のイヤリングをつけて表面だけ着飾ってはいる。貴族の娘らしく取り繕ってはいるけれどもフレデリクには不釣り合いなようですぐにこの場から逃げ出したいくなつてしまう。

「そうですか、いや、そうね……」

緊張しているわたしに、フレデリクは笑う。そして耳元でそつと囁いた。

「……ここじゃキミにはつまらないだろうから場所を移そう。普段王家の者しか閲覧できない貴重な図書館なんてどうだい？」

「っ！ いいの?!」

思わず弾けるように顔を上げれば、フレデリクはクスクスと笑う。しまった、と後悔してももう遅い。

「じゃあ、決まりだね。ボクから話をつけていてあげる」

「あ、ありがとうございます。殿下」

「まったく、他人行儀な真似はやめてくれといったのに……。さあ、いこうか」  
差し出された手をおおずと取れば、手袋越しにフレデリクの体温が伝わってきて、心臓の鼓動が早くなる。

「じゃあ行こう。久しぶりにヘレナの話も聞きたいしね」

穏やかにほほ笑みかけられると、抑えつけていた気持ちがあふれ出しそうになる。自分の気持ちに気づかないふりをしながら、わたしは黙って彼のエスコートを受けた。

宮殿に隣接する王家の図書館は、まさに圧巻だった。歴史的に貴重な書物だけでなく、魔導書や魔法道具も所狭しと保管されており、どれから手に取ろう

か目移りしてしまふ。

「すごい……」

あつげにとられるわたしを、フレデリクはほほえましそうに見ていた。部屋に二人きりしかいない状況よりも、貴重な書物に気を取られてしまふ。

「自由に見ていいよ、ボクのことには気にしないで」

婚約者を放って読書に没頭するのはどうなのだろうと一瞬頭によぎるが、手はもう本棚へ伸びていた。食い入るように読んでいると、背後でフレデリクが笑った気がした。

「ヘレナは本当に本が好きだね」

「ええ、一日中ここにも飽きる気がしません」

正直に答えると、フレデリクがふふ、と声を立てて笑う。そして本に影が落ちてふりかえると、フレデリクが後ろからゆっくりとわたしを抱きしめてきた。

驚きのあまり持っていた本を落としそうになったが、すんでのところでそれは耐える。

「昔は名前で呼んでくれていたのに、もう呼んでくれないの？」

拗ねたような声が耳元をくすぐる。耳朶に息がかかると、全身がぞわりとした感覚に襲われて力が抜けてしまう。困惑するわたしに構わずフレデリクはそのまま耳元でささやき続ける。

「ねえ、ヘレナ……ボクはキミが好きだ。知識に貪欲なところも、理知的なところも、落ち着いているように見えるけれど本当は優しい女性だってことも知っているよ。キミのことだから、なにか策略があつて自分のところに婚姻の話が来たと思っっているかもしれないけれど」

「そ、そんなことは」

凶星を突かれて思わず口ごもる。しばらくまともに言葉を交わしていなかつ

たはずなのに、どうしてわたしの考えていることがわかるのだろう。

「ボクはキミと結婚したい、キミ自身が納得して、ボクに嫁いでもらいたいんだ」

真摯な声色で囁かれる甘い言葉にめまいがする。政略結婚ではなくて、本当にわたし自身が望まれているのだと信じたくなくなってしまふ。

「わ、かりました。このお話、お受けします」

顔を見れないままどうにか言葉を搾り出す。返事をした瞬間、肩を掴まれて身体を反転させられた。

「あっ」

赤くなつた頬を見られて、視線をそらそうとするが顎を指で掬い取られて視線が逸らせない。

「あ、の、フレデリク、は、恥ずかしいわ……、離して……」

動揺して思わず幼いころのように名前で呼んでしまえば、フレデリクは嬉しそうに目を細めた。

「ふふ、また名前で呼んでくれたね、ヘレナ。うれしいよ、これからは夫婦になるから昔みたいに、いや、昔以上に仲良くしたいな」

口元を緩ませたフレデリクの整った顔が、ゆっくりとわたしに近づいてくる。思わずぎゅっと目を閉じれば、柔らかくて温かいものが唇に触れた。

「っ……！」

何が起きたのかわからずに瞬きを繰り返すわたしを見て、フレデリクはいたずらっぽく笑った。

「な、なにをするの、いきなり」

「すまない、あまりにヘレナが可愛かったものだから。キミといるとどうも調子がくるっていけないな」

もうじき日が暮れるから馬車を手配するよとはぐらかされる。わたしは結局口づけの意図がわからないままに家路へついた。

メイドに出迎えてもらい、上着を預けて息を切らして階段を上る。自室へ向かう途中両親の部屋の前を通ると、ドアの隙間から声が漏れ出ていた。そのまま立ち去ろうとしたが、いつも冷静な父が珍しく動揺して声を荒げている。いけないとは思いつつもこつそりと耳をそばだててしまった。

「本当なのか、ヘレナとの結婚を白紙にしたいと早馬がきたというのは」

「それがどうも貴族たちのなかに、聖女様と王子を結婚させて教会勢力を取り込んだ方が得策なのではという話があったみたいで、陛下も迷っておられるらしいのです」

両親は声を潜めているつもりらしいが、動揺のせいか自然と声が大きくなっている。

「一度承諾したものを、また白紙にしてほしいなどとふざけた話があるか。我々を、いやヘレナを侮辱しているのか」

「そのことですが、まだ内々で決まっていることであって公表はしていないというのが先方の言い分らしいですわ」

「まったく、どうしたものか……」

頭を抱える父の姿に、わたしはそうつとその場を離れる。まだキスされた名残が残っていた唇の熱がさっと冷めていった。早足で自室へ向かい、ドアを閉めた瞬間にわたしはドレスが皺になるのも構わずにずるずるとししゃがみ込む。口紅が手袋に付くのも気にせず、ごしごしと唇をぬぐう。一瞬だけ見た甘い夢なんて、忘れてしまいたいのに、あのやわらかくてしっとりとした感触は消えなかつた。

わたしに微笑んだように、異界の乙女にも愛の言葉を囁くのだろうか。その想像が頭を駆けめぐった瞬間、わたしは手袋を脱ぎ捨てる。

「……なにが夫婦になるから昔みたいに仲良くしてほしい、よ。嘘つき……！」

力なくつぶやいた言葉は静寂にのみこまれて消えていった。

平静を装いながら夕食の席に着く。食欲が湧かないままなんとかすべて食べ終え、いつも通り湯浴みしてベッドに身を横たえる。考えてはいけないとわかっているのに、頭に浮かぶのはフレデリクのことばかりだ。神に選ばれた乙女は宮廷で何度か見かけたことがある。天真爛漫な雰囲気は少しヴィヴィアンにも似ていた。少し丸みのある幼いけれど庇護欲がわく顔立ちに、小鳥のさえざりのようなかわいらしい声。フレデリクでなくたって、男であればどちらを選ぶかなんて明白だ。いつもわたしは選ばれなかったから、きつと今回もそうなってしまう。そんな悲しい確信めいた予感が、ある。それなのに、思い出すのはあの口づけばかりで頭がおかしくなりそうだった。

「……ひとつだけあるじゃない。フレデリクがわたしとの結婚を白紙に戻せな

くする方法が」

頭に浮かんだ企みを実行に移すため、皆が寝静まったのを確認してこっそりと窓を開け放つ。

「……重力の楔から我を解き放ちたまえ」

足下に風が起こり、身体の重みがなくなつたかのように空中へ浮き上がる。

物音を立てずにこっそりと屋敷を抜け出す。ここから王宮はそう遠くない。

門番の目を盗んで忍び込むのも、魔法を使えば難しくはなかつた。

何度も訪れているおかげか、この途方もなく広い王宮の間取りも頭に入っている。目的の場所へいくのはあつけないほどに簡単だつた。浮遊呪文を使って、フレデリクの寝室のバルコニーへたどり着く。解錠の呪文で窓を開け放ち慎重に寝台へと近づく。すうすうと寝息を立てながら無防備に眠っているフレデリクの髪を撫でる。無防備にベッドに身を預けている姿さえ整っていて、胸の奥

がちくりと痛む。どうやったって、フレデリクとわたしじゃ釣り合わない。

「フレデリクが悪いのよ。わたしに期待を持たせるようなことをするから」

婚約した女が身重になれば、もう翻すことはできないだろう。わたしに価値がなくとも、王家の血を継ぐ子を孕んだ公爵家の令嬢をないがしろになんてできないはずだ。

わたしはさらに深い眠りへ誘うように呪文をかける。これで朝まで起きてはこない。頬を撫でて、無防備に開いている薄い唇に指を這わせた。意を決してわたしは顔を近づけていく。規則的な寝息が顔にかかる。無防備な寝顔がひどく幼く見える。わたしはたまらなくなつて、思わずキスした。やわらかくて、あたたかい感触にドキドキしながら、夢中になつてついばむ。罪悪感が頭をもたげるけれど、もう後戻りできない。

「あつ、フレデリク……すきっ……」

角度をかえて何度も口づける。わたしの独りよがりな行為を知らずに、フレデリクはのんきに夢の世界にいる。それがおかしくて、わたしをさらに大胆にさせた。

「ここままでしても起きないなら、もつとしてもバレないわよね」

言い訳するように呟いて、バスローブの合わせ目をはだけさせる。鍛え上げられた胸筋に触れば、力を入れていないせいかわらかい。わしづかみにすれば、おもしろいように指が沈んだ。色の薄い乳首にちゅつと口づければ、わずかにフレデリクがみじろぐ。

「ふふ、もしかしてここが感じるの？ 女の子みたい……、貴公子然としてるあなたがこんなところで感じるなんて、いつもあなたに熱い視線を送っているご令嬢達は知らないでしょうね」

ほの昏い優越感が湧く。バスローブの帯を解いて、下着をずらせばわずかに

頭をもたげ始めている肉棒が目に入る。

「もしかしてわたしに触られて感じちゃった？　好きじゃない女に触られても感じるのね」

やわらかい性器を手で包み込んできちなく上下に擦る。肉と肉が擦れるような感触に不安になるが、鈴口から透明な液体がとろとろと流れ出ていることに気がついた。多少なりとも感じているらしい様子に安堵する。

「ふふ、堪え性のないひと。こんな情けない姿、聖女さまがみたら驚くでしょうね」

張り詰めた肉竿は天を向き、お腹に張り付かんばかりに勃起している。固く膨れ上がったそれに、きゅんっとお腹の奥が熱くなるのを感じる。

「勃起しなきゃやめてあげようかな、と思ってたんだけど。しょうがないわよね、だってここが触ってほしそうにしているんだもの」

苦しい言い訳を並べ立てながら、屹立の裏筋をつうつと指でなぞる。ビクビクつと震えるそれはまるでそこだけ別の生き物みたいだ。尿道に軽く指を押し込めれば、びくびくと竿が震える。

「……先っぽが気持ちいいの？　ふうん、フレデリクの弱いところ、見つけちゃった」

ほくそ笑みながら、右手で雁首の段差を撫でながら、左手で鈴口をくすぐるように撫でる。時々フレデリクがうめき声をあげるけれど、呪文を掛けたこともあって安心しきっているわたしはさらに大胆に愛撫をしていく。先走りがあったしの手を濡らし、だんだんと滑りがよくなっていく。フレデリクは眉をひそめ、白い頬をほのかに染めて、うめくように喘ぐ。

「んっ、はあ……」

「夢の中では誰とセックスしてるのかしら。ヴィヴィアン？　それとも聖女さ

ま？ でも残念、あなたに淫らなことをしているのはわたしなのよ♡わたしの気持ちを知っていて、期待なんてさせるフレデリクが悪いんだから。本当にひどい人」

ぐちゅぐちゅっ♡と卑猥な水音を立てながら、上下へしごきあげれば手の内でビクビクと震える。破裂しそうなくらい膨れ上がった亀頭に、ちゅっ♡と口づけをする。先走りの青臭い味が鼻孔をくすぐる。でもその臭いさえ、自分しか知らないのだと思うとおしい。目が覚めているときの彼であれば、どんな女性にもこんな下卑た真似はしないだろう。彼の高潔さを踏みにじっているようで、ぞくぞくと背筋に甘い痺れが走る。

「んちゅっ♡んぶっ♡ほらっ、出しなさいよ♡ほらっ♡ほらっ♡」

亀頭に吸い付きながら、竿をしごきあげて吐精をうながす。限界が近いのか、フレデリクの太ももの筋肉が強張る。

「はっ♡ああっ♡」

フレデリクの呼吸が乱れていく。鈴口を舌でほじくるようにつけば、ドクンッと肉竿がひととき張り詰めていく。ドキドキしながらぢゅうっ♡と思い切り吸い付けば、わたしの口のなかで弾けとんだ。

「ん♡ん♡ん♡っ♡」

びゆる、びゆるるる♡と勢いよく吐き出された白濁が喉奥に叩きつけられる。青臭いそれをどうにか嚙下して飲み干した。

「ははっ♡品行方正なあなたが女性にこんなことをするなんて目が覚めてたら卒倒しそうよね、でもこれだけじゃ終わらないわよ」

一度精を吐き出したのに、また兆しはじめている肉棒をそっと手に取る。竿をしごきながら、舌で亀頭を舐めまわすとすぐに固さを取り戻した。わたしはふところに忍ばせていた小瓶を取り出して、液体を一気に煽る。破瓜の痛みを

和らげ、快樂を増幅させる媚薬だ。おまけに子種の定着も促す効果がある。

「これでよし、と。大好きよ、フレデリク。あなたのこと、一生逃がさないから」

「それは光栄だ」

ふいに響いた男の声に、わたしは目を見張る。

「お、起きて……」

「あんなに情熱的にされたら誰だって目が覚めてしまうよ」

苦笑するフレデリクに、さっと血の気が引く。もう一度眠らせようと詠唱を口に上らせる。けれども、フレデリクの目は冴えたままわたしを見つめている。

「ど、どうして」

「ヘレナは座学だけでなく魔法の実技も優秀だったね。けれどもそういう精神に干渉するような呪文はボクにはきかないんだ」

そういつて彼は右腕を軽く掲げる。細い金色のチェーンを凝視すると、確かに加護の魔術がかかっていた。なぜこんなバカな真似をする前に、ちゃんとフレデリクをあらためなかつたのだらう。自分のうかつさを責めるが、これ以上ごまかしようがない。

「……そう、もうどうしようもないってことね。まだ家族の他には婚約の話がもちあがったことは誰も知らないし、破談にしたとしても問題ない。明日にでも正式に使いをやってちょうだい。それに、わたしが勝手に忍び込んだのだから、門番や見回りも悪くないわ。報いを受けるならわたしだけにしてちょうだい」

極力感情を押し殺しながら一息にいつて、ベッドから離れようとする。けれどわたしの身体はつんのめつて、動かなかつた。

「えっ……」

振りかえればフレデリクが恍惚とした表情でわたしを見つめながら微笑んでいる。

「どうして婚約破棄なんてするの？ やつときみが本当の気持ちをきかせてくれたのに」

強い力で腕を引かれて、ベッドに縫いとめられる。あつというまに覆いかぶさられて、わたしの頬を銀髪がくすぐった。

「フレ、デリク……？」

「逃がさないよ、ヘレナ」

耳たぶをくすぐりながら、低く甘い声で囁かれる。困惑しているわたしに穏やかに微笑みながら、フレデリクはわたしのドレスを素早く脱がせ、下着の紐をゆるめていく。

「や、なにつ……！！」

「なについて、キミが望んだんだろう？ たーっぷりここに子種を注いであげる♡」

わたしの薄いお腹を、フレデリクが人差し指でつつとなぞる。いまからマーキングしてやるという宣言のようにゆっくりと指を這わせた。なにがなんだかわからず身体を硬直させたままフレデリクの顔をだまって見つめるしかできない。

フレデリクはちらりとベッドサイドに置いた空の小瓶に視線をやり、やがて納得したように頷く。

「ああ、この葉ならボクも知っているよ。確か感じるほど子種の定着がよくなるんだよね。いいよ。たっぷり前戯してあげるはー路」

黒髪を一房とられて、ちゅっと口づけされる。うなじ、鎖骨とキスされて、そのまま唇が下へうつっていく。そして白い双丘のふくらみを吸われてしまう。

さらさらの髪の毛が、胸の飾りに触れくすぐったいようなむずがゆいような感覚に襲われる。

「ヘレナのここも、期待してるみたいだ。さっき気持ちよくしてくれたお返しをしてあげるね」

赤い舌を見せつけながら乳輪の縁を焦らすように唾液でぬらしていく。夜這いがバレたのにわたしを抱こうとするフレデリクに困惑しているのに、熱い舌が這わされると刺激を待ち望んでいるかのように、乳首がぷくつと頭をもたげた。

「ふふ、おっぱい愛されて感じちゃった？ いいよ、たくさんかわいがってあげる」

肉厚な舌で乳輪ごとれろおっと舐め上げられる。左右の乳首を両方交互にべろべろと舐められる。滑りをした乳首を、指の腹で唾液を塗り込めるように、

乳首の先っぽをスリスリされる。ぬちゅっ♡ぬちゅっ♡と水音を響かせながら乳首を根元から先端にかけて何度も抜かれてお腹の奥がじわじわとうずき始める。

「あ♡、や、やめっ……」

「さっき乳首を舐められて兆したボクのことを女の子みたいって笑っていたけれど、さすがヘレナは真正銘の女の子だね。ボクよりずいぶん乳首が好きみたいだ♡」

「なん、で、わ、わたしを抱くつもりなの？」

もっとかわいらしい、条件のいい結婚候補がいるのに、乗り換ええないなんてどうかしている。腑に落ちないまま快楽に濡れた瞳で見つめると、フレデリクは心底不思議そうに首を傾げた。

「さっきからおかしなこというね。夜這いしたのはヘレナだろう」

「固く勃起させた乳首を唇で食み、そのまま軽く引っぱられる。ぐいっ♡ぐいっ

♡と乳首を伸ばされるたびに甘い声が勝手に漏れちゃう。

「だ、だって、わたしとセックスなんてしたら聖女さまと結婚できなくなっちゃうっ」

「……なんでそこで聖女さまが出てくるの？」

「ばったっ……」

敏感な、薄い皮膚に歯を立てられてちりつと痛みが走る。なにか気に障るようなことをいったらどうかと困惑して顔をまじまじと見つめると、口元は微笑んでいるのに冷たい瞳をしたフレデリクと視線がかち合う。

「お、おこってる……？　なんで」

「ああ、ごめん。あんまりヘレナが無自覚だからすこし意地悪してしまったね」  
歯の形にくぼんだ乳頭を慰めるようにチロチロと舐められる。痛みの余韻が、薄い皮膚を何度も何度も舌が這うことで甘い痺れに塗り替えられる。

「だ、って、聖女さまと結婚するならわたしと結婚する理由なんてないじゃない。わ、わたし聞いたんだもの。わたしとの婚約を白紙にするって、早馬が来たって」

「……いったい誰がそんなことを。そんな話、僕は了承していないよ。父上が誰かに唆されたのかな」

「で、でも、陛下の思し召しならわたしと結婚する必要なんてないでしょう？ 王家にもたらす利益は聖女さまのほうが大きいだろうし、わたしなんかよりよほどかわいらしい方なもの」

そもそもこの婚約話は、聖女によって増長されるであろう教会の権力へ対抗するもの。だから聖女を王族側へ取り込むことができればそれが最良の選択のはず。

「キミは昔からなんでも考えすぎるけれど、今回はひどい思い違いをしている

ようだね。ボクが好きなのは昔からヘレナだよ。だから婚約できて舞い上がって口づけまでしてしまったのに」

信じられないと目を見張るわたしにかまわず、フレデリクは胸への愛撫をやめない。かぷりと白い膨らみに歯形をつけられて、ひゅつと喉がしまった。

「う、嘘よ」

「へえ、ヘレナはボクのこと信じてくれないみたいだね。じゃあ仕方ないな。もう疑いようもないくらい、たくさん痕をつけてあげる。いやだっていつでもやめてあげないよ♡ヘレナがボクの気持ちを認めるまで離してあげないから」

「びっ♡」

かぷりと歯を立てられて、太ももが震える。痛みに混じった甘いしびれが全身にじわじわと広がって、きゅうっ♡と奥がぬかるんでしまう。

「ふふ、ボクのものって証をつけられて感じちゃったのかい？ いいよ、全部

愛してあげる♡」

骨張った手が、太もものあわいに滑り込む。なにをされるのかわかって力をこめたのに、やすやすと左右に開かれてしまった。熱くぬかるんだ媚穴が外気に晒されてひくんつと震える。むわつとしたメスの匂いが立ちこめて、わたしはぎゅつと目を閉じた。

「ふふ♡すっごいエッチな匂いがするね♡ボクを誘いたくて準備万端だったのかな？」

「ひぐっ♡ちがっ♡」

むき出しになった媚肉を、指でくぱあつと広げられる。冷たい外気に触れた肉びらがヒクッヒクッ♡と物欲しげに蠢くのをみてフレデリクは淫靡に瞳を細めた。

「ちがわないでしょう？ クリトリスもこんなにかわいく勃起させて♡いやら

しいね、ヘレナは♡」

むくつと頭をもたげているクリトリスを、長い指できゅうつとつままれる。

指で圧迫されながら、抜くように上下にしごかれてぞわつと甘い痺れが背筋を駆け抜けた。

「や、やらあ♡そこいじっちゃ♡」

「イヤじゃないだろう？♡ほら、こりこりっしてあげる」

クリトリスの根元を圧迫しながらゆっくりと上下させられる。自分で慰めた時とは比べものにならないほど強い快感が波のように押し寄せてきて、わけがわからないまま、甘い声が勝手に漏れてしまう。

「い♡あ♡♡♡くりとりすいじめないで♡」

いやいやと首を振って拒否しているつもりなのに、媚びるような声は止められない。それどころか媚びるような甘ったるい声色は、全然いやがっているよ

うには聞こえない。

「だーめ♡へレナが素直になれるまでやめてあげないよ♡ほら、イってごらん、クリトリスいいこいいこされてイっちゃうとこ見せて♡」

グミの实のように充血して芯を持ち始めた肉芽を根元から先端まで、何度もしごかれる。抜かれるたびにビリビリと甘い電流が全身に広がってたまらない。太ももがずっと緊張してふるふる震えてしまう。

「ほら、我慢しないでへレナ♡腰へコへコして気持ちいいってちゃんと教えてごらん？」

「そ、そんなはしたないこと、できなっ♡ひあっ♡♡♡」

指をそろえて平にして、拭き掃除するみたいに肉芽をこしっ♡とこすられる。強い刺激に、わたしは背中をのけぞらせて腰を突き出してしまっ♡

「いっ♡お♡♡むりっ♡そ、それ、だめっ♡」

「へえ、はじめてなのに指で優しくシコシコってさせるんじゃないやなくて乱暴にクリトリス手のひらでごしごし押しつぶされるほうが好きなんだ♡本当に媚薬でエッチになってるんだね。それとも元から？」

勝手なことを囁きながら、フレデリクは肉芽を手のひらでグイグイと圧迫してくる。円を描かれてクリをこねくり回されながら、恥丘へ押し込むように手のひらをぐっと押し付けられて、気持ちいいのが止まらない♡

「おっ♡あ、あゝ♡♡やらっおっ♡いぐっ♡♡いっちやうっ♡」

「いいよ、クリトリスごしゅごしゅされながらイってごらん。マジメなヘレナがどんな顔でイクのか教えて♡」

ぐりゅっ♡ぐりゅっ♡と円をかくように押しつぶしていた手のひらをぱっと離して、クリトリスをつままれて先端をごしゅごしゅ♡指の腹で磨かれる♡一番敏感なところを指で容赦なく擦られて、ぞわぞわと尿意に似た感覚が駆け上

